

---

# 幽霊検証/3Z

深海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幽霊検証／3Z

### 【Zマーク】

Z6831A

### 【作者名】

深海

### 【あらすじ】

クラスメートの花子から、使われていない更衣室にまつわる怪談を聞いたメンバー。神楽の提案で検証しに行くことに。

男子更衣室にある使われてないロッカーの右から一一番田から、毎晩の様に男の子のすすり泣く声が聞こえるの。

シクシク…シクシク…。

とても悲しそうな泣き声が。

その男の子はね、いじめを受けてて、ある日ロッカーに閉じ込められちゃったんだって。そしたらそのロッカー、鍵が壊れてて出てこれなくなっちゃったの。

次の日、男の子がいなつて騒ぎになつて、いじめてた張本人達がヤバイつて更衣室に行つたの。そしたら…。

ガターン！

「きやーー！」

「ひつーー！」

夕暮れに照らされる教室の中、ほつきを持ったおかっぱの女の子を囲む新八、神楽、お妙、沖田、土方。

どうやら掃除を途中で投げ出し、話に夢中になつていたようだ。そこへいきなり机が倒れ、そこにいたおかっぱの女の子以外の面々は皆驚く。

見ると見事に引っくり返つている土方。

「何してんだイ土方わん」

「いや…蛍光灯の埃を落とそうと思つたらバランス崩してよ」

顔を真っ青にし、怖がつてゐるのはばればだが平静を装つ土方。新ハは額に手を当て溜め息をつく。

「 もう、土方さんのせいに台無しじゃないか…それにしても花子さんの話は本当にあつた事みたいで怖かったなあ。あ、ちよつと神楽ちゃん…」

オチを台無しにされた事を怒り土方に掴みかかる神楽を止めに入る。

「あらあら神楽ちゃん。女の子が駄目よ、はしたない。おとなしくしないとケツの穴にほつをぶちこむわよ」

「お妙わん、その台詞もはしたないんじゃないですか」

汚い言葉を吐くお妙はそれでも笑顔で、なんとか土方から神楽引き離した新ハがつっこんでも全く動じない。

「…今の話ね、本当の事なんだよ」

その声に、すっかり存在を忘れていた花子を一瞬見えた。一瞬で教室が静まり返った。

「どうこいつ事だい」

「3年P組のさつひやん。1年O組の屁怒呂君。1年X君の松平君。他にも何人も本当に泣き声を聞いてるの」

信じられないと顔を見合わせる。そんな噂は初めて聞いたのだ。神楽が新ハの腕を振り払い、何かを企んでいる様に口元を歪める。それを見た新ハは嫌な予感がした。

「か…神楽ちゃんまさか…」

「今晚皆で検証に行くね」

「おっ俺はそんなくだらねーモンに参加しねえぞ。なあ総悟

土方が沖田を振り返ると、沖田は一つの間に用意したのか、皆に見える様に一枚の紙を掲げた。

「何だ……？」

「今晚ここに書いてる物を各自持つて十時に校門前に集合でさア。」

「マジか……」

土方の顔はこれ以上無理と言つ程で書がめていた。

一、時間・場所

PM22:00銀色魂学校校門前

一、持ち物

沖田…懐中電灯

土方：数珠

新八：メガネ

お妙：武器（己の拳）

神楽：非常食

continue

そして21時45分。辺りはすっかり暗くなり、普段明るい陽射しに照らされた学校とは一味も二味も違い、薄気味悪い。非常口の緑色の光がなんとも言えない雰囲気を作り出していた。

「あ、神楽ちゃん！」

新ハとお妙が学校に着いた時には、すでに神楽が門の前にしゃがんで待っていた。

「姐御に新ハ、準備はオーケーアルか」

手に持っていた酢昆布を得意気に見せ言う神楽に、新ハはメガネを光らせ、お妙は笑顔で握り拳を見せた。

「皆さんお揃いで。さ、早速行きやしょ、」

ライトが付いたヘルメットを被り、何か大きな物を引きずつて現れた沖田。暗くてよく見えなかつたが、近付いてくるにつれ、それがふてくされた土方だとわかつた。

「早速つて言つても鍵締まつてますよ？」

「安心しなせエ。帰り際に不倫中に外してた結婚指輪をなくした。戸締まりはして帰るから鍵を貸してくれつて言つたらこの通り。馬鹿ばつかで助かりまさア」

沖田の手には鍵の束が握られていた。こんな簡単に生徒に鍵を預ける学校なんて有り得ない。

新ハは頭痛を覚えた。転校しようか等と考えている間に沖田は門を結んでいた太い鎖を外す。

「よーし…幽霊退治アルヨ！」

先頭を切つて歩き出す神楽。皆それに続いたが、ただ一人土方だけはその場に立つたままだつた。それに気付いた沖田が振り返り土方に歩み寄る。

「な…なんだよ。ここまで来たんだからもういいだろ。後はお前らだけで行けよ。ここで待つてようと思います」

沖田は何も言わず土方の襟首を掴むと、踏ん張り歩こうとしない己よりも大きな土方をズルズルと引きずつて行つた。土方はポケットの数珠を取り出しきつて握り締めた。

「うわ～夜の学校つて初めて来たけど…とにかくすげいな…」

カツンカツンと足音が響き、その後ろからは靴を擦る様な音が聞こえてくる。

先頭に立つているのは神楽。少しも脅えた様子はなく歩いて行く。お妙は神楽に腕を絡め、ピッタリとくつついている。その一人の後ろに隠れる様にしているのは新ハ。なんとも情けない姿である。校内は非常口を知らせる小さな看板の光があるお陰で、思つたよりも明るかつた。だがやはり足元はおぼつかない。

前ばかり気にしていた新ハの足が、廊下に備え付けてある消火器を蹴り倒した。

カーン…

「いやあああー！」

誰もいないために大袈裟に響く音。それに驚いたお妙が、辺り構わず殴り散らす。

「ちよつ！お妙さん！僕が消火器蹴ぐふつ！」

お妙の拳が綺麗にヒットし、倒れる新ハ。お妙はそのまま憲硝子を割つたりしながら暗闇に消えていった。

「あーあ…どうするんでイ。これ…」

お妙と同じく驚き逃げようとする土方をしつかりと捕まえている

沖田。

「僕は何も知らない。見てない。何もしてない…」

「姐御…安らかに眠るアル…」

お妙が消えた暗闇に向かつて手を併せる神楽。皆もそれにならつて手を併せると先へ進んだ。

con-  
tinue

「どうどう着こちやいましたね…」

「何も聞こえないネ」

「開けやすゼイ」

「おい、ちょっと待て総悟。今ならまだ引き返せるだ」

男子更衣室にたどり着いた四人。土方が止めたにも関わらず、沖田は躊躇いもなく扉を開けた。

皆息を飲み、暗い室内に目を凝らして耳を澄ませる。

シクシク…。

皆田を見開き固まる。確かに泣き声が聞こえた。

シクシク…

男の泣き声が室内に響き渡る。皆それぞれ、お前が行けと指を差し合う。これではらちがあかないと思った沖田は土方を突き飛ばした。

「うおつ！」

ガタンと音を立てロッカーにぶつかる土方。使われていないロッカーの右から「一番目に」土方の全身からどつと汗が吹き出る。錆び付いた鈍い金属音を立てゆっくりと開かれていく扉。そこには…。

「うわあああーー！」

その姿を確認する前に机の下に潜り込む土方。他の三人の視線はロッカーに釘付けだ。

「あれ…トシか？それに皆も…助かってた…」

そこから出てきたのは、なんと近藤。皆の姿を見て安堵の溜め息

をついている。

「い、近藤さん！」「なんといひで何をしてんですか！」

「土方さん、幽霊の正体は近藤さんですぜ。土方さん、土方さん」  
何度呼んでもガタガタと震えているだけの土方。

近藤は後頭部を搔き、豪快に笑つた。

「いやあ、部活の後うつかり寝ちまつてな。起きたら真っ暗だし、鍵は開かないし、今夜はここで夜を明かそうと思ってたんだよ」  
溜め息をつく新ハと神楽。すっかり拍子抜けしてしまつた。

「だからつて何でロツカーの中で泣いてるね。しかも噂のロツカーで。タイミング良すぎるワ。このゴリラが

「え？ 僕泣いてなぐあつ！」

突然近藤の顔面に消火器が直撃した。驚いた新ハと神楽が振り返ると、そこには目が虚ろなお妙が立つていた。

「幽霊がなんぼのもんじやア！ アタイがぶつ殺してやらアー、総長の座はアタイのもんじやアア！」

「ヤバイヨ！ 姐御が御乱心ネ！ 新ハ、取り押さえるアル！」

暴れるお妙を必死に押さえ込む神楽。だが新ハは何やら考え込んでいる。

「ちよつ…ちよーつと待つて神楽ちゃん…近藤さん、泣いてなつて言いかけてたよね…」

「ど、どういう意味ネ」

「泣いてない…つて事かイ？ 確かに近藤さんは泣いてた様に見えねーや」

気絶している近藤の頬には涙の跡は見られず、先程まで泣いていたのなら睫毛くらい濡れてもよさそつだが、その痕跡も見られなかつた。

三人の視線がロツカーに集まる。

「どういう事ネ！ 扉が閉まってるアル！」

確かに開いていたはずの扉がピタリと閉じられていた。もちろん誰も触れてなどいない。

暴れていたお妙も正氣を取り戻し、ロッカーを見つめた。

「どういう事なの新ちゃん…」

「しつ！何か…」

シクシク…

「な、泣き声かい？」

シクシク…シクシク…

ギギギギギギ…

「ぎいやあああ…」

「いやあああーーー！」

「へ…ヘルペス！ヘルペスミーーー！」

「本物がおいでなさつたみてーだなア…逃げろーー！」  
それぞれ叫び声を上げ一斉に走り出した。氣絶した近藤と、机の下にいる土方を残して。

contine

シクシク…シクシク…

「ん? 何かあつたか…?」

叫び声を聞き、我に返つた土方。顔を上げると、体をこわばらせた。机の向こうに何者かの足が見えたのだ。男物の制服の様だった。

シクシク…

なぜか近藤が倒れているのが見えた。だんだんと近付いてくる足は誰かの悪戯だろう。

土方は震える声を振り絞つた。

「おい、近藤さん。何でそんなとこに寝てんだ? そ…総悟? それとも新八か?」

机の前でピタリと止まつたその足がゆっくりと動いた。どうやら机の下を覗こうとしている様だ。

「お…い…悪ふざけはやめるよ…」

シクシク…シクシク…

その足の持ち主が机の下を覗き、土方はその人物としつかり目が合つてしまつた。

次の日男の子がいなつて騒ぎになつて、いじめてた張本人達がヤバイつてロッカーに行つたの。そしたら…。

シクシク…

「おい！柳！いるのか？」

シクシク…

「まさか開かないんじゃ…」

「ちつ！おい！今開けてやるけど俺らが閉じ込めた事チクッたらぶつ殺すからな！」

ギギギ…

「つ！？」

「いない！？」

シクシク…シクシク…

「でも泣き声が…」

「僕ね、いじめられてたんだ…」。

「ひいっ！柳の声だ…どこから…」

君たち友達になってくれる？僕一人も友達いないんだ。

「お…俺らが悪かった！許してくれ！」

本当？ 嬉しいよ…。

「ぎゃあああーーー！」

「大変だ！土方さんがいない！あと近藤さんも…」

「もう戻りたくないネ！」

「ほつときなせエ。あんなマヨ野郎」

全速力で校門まで駆けてきた四人。肩を上下させ苦しそうに呼吸をしながら校舎を振り返る。

「うわあああ！」

聞こえてきた悲鳴に顔を見合わせる。

「今の…」

「土方さん…よね？」

「取り憑かれたアルか！？取り殺されたアルか！？」

「あーあ…お氣の毒にねイ…」

その後ね、先生達が悲鳴を聞きつけて更衣室に行つたの。そこには目をカツと見開いた数名の生徒が倒れていて、もうすでに息はなかつたんだつて。何があつたんだつて驚く先生達の前でいきなりロッカーが閉まつたの。そしたら男の子の悲しいすすり泣く声が…。

シクシク…

その男の子は今も見付かつてない。今もあのロッカーの中で友達が来るのを待つてゐるのかもしれないね。

## オマケ？（前書き）

前回で完結してるので読まなくとも大丈夫ですが、オマケみたいなもの

です。

氣絶していた近藤が起き上がり、倒れている土方を見下ろしている口から血を流した苦悶の表情を浮かべる男の子の横に立った。

「先生、やりすぎじゃないですか？トシのやつ泡吹いてますよ」

先生と呼ばれた男の子が顎辺りに手をかけ、顔を剥がした！…ではなくゴムのマスクを外した。男の子の正体は教師の銀ハだったのだ。

「これでも足りないぐらいだつての。ま、これでこいつらも少しはおとなしくなるでしょ」

今回の事は全て銀ハが仕組んだ物で、問題児たちを少々懲らしめようと計画したのだ。だが、いささか上手くいきすぎた様だ。

「それにしてもこつも上手くいくとはな…」

「ああ、花子さんのお陰ですよーすごい話がリアルで恐怖がつてしましから。おーい、花子さん」

口元に手を当て花子を呼ぶ近藤。どこにいたのかすぐに現れた花子は銀ハに笑いかける。その笑顔を見た銀ハの表情はひきつる。

「その子…誰？」

「何言つてるんですか先生、花子さんですよーいくら存在感がないからって先生が忘れないでくださいよー！って俺も花子さんの事忘れてましたけどね！」

花子の肩に手を置き豪快に笑う近藤。銀ハは一人からゅつくりと後退り離れる。

「…花子なんて生徒いないんですけど…」

「…え？」

ピタリと笑うのを止める近藤。肩に置いた手をそのままに、花子の方を見れずにまっすぐ銀ハを見る。

「あのね、いじめられてたのは男の子じゃなくて女の子なんだよ」  
近藤から離れロッカーに歩み寄る花子。

「その女の子、友達いなくてとても寂しかったの。でも、今日少しでも皆と話せて寂しくなかつたんだって。だから誰も連れて行かないよ」

花子は何も言わずに固まっている一人に向かって微笑むと、スー  
ツと音もなくロッカーに消えていった。右から一番目のロッカーに。

fin

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6831a/>

---

幽霊検証/3Z

2010年10月10日22時37分発行